

## 登校と不登校のあいだ

### —瀬尾まいこ『温室デイズ』論—

秦 光 平

**要旨** 本稿では、瀬尾まいこの長編小説『温室デイズ』（二〇〇六年）を分析する。本作には「いじめ」被害者となつてもなお「学校に行きたい」と希求する女子中学生の姿が描かれており、旧来の学校中心主義への退行であると批判的に捉えられる機会が少なからずあった。しかし、本作は学校に通いつづける少女と、いちど不登校になる少女の二者の姿を通して、学校に行く意味と学校に行かない意味の双方を問うている。さらに、いちど不登校になつた少女により、学校外の文化が学校内に持ち込まれる展開も生じている。これらの表現に着目し、本稿では、自分のあり方を登校／不登校のいずれにも決められない人々が時空間を共有しうる場として、学校空間そのものの意義を再定位した作品であるとする評価を提示した。

【キーワード】瀬尾まいこ、いじめ、不登校、オルタナティブ教育、非行

はじめに

文学作品に描きこまれた「いじめ」<sup>1</sup>は、学校文化へのアンチテーゼとしての意味合いを帯びる。学校に通うことが当然とみなされる社会に対し「しかし、学校ではこんな醜悪な暴力が起きているではないか」と告発するはたらきをもつからである。

研究上も、「いじめ」の問題化と結びつけられる形で学校文化への批判意識が示される場合は多くあつた。日本で「いじめ」が社会問題化した一九八〇年代以降、多くの論者によつて「いじめ」は論じられてきたが、「いじめ」を生む原因の一端として、公教育と密接に結びついている学級制度に厳しい目線を向けた論考は少なからずある。柳治男は、子どもを強制的に組み込むことにより学級が《事前制御に伴う自己抑制を贋うための、児童・生徒によるさまざまな衝動的代償充足行動を生み出す温床》<sup>2</sup>となつてしまふ危険性を唱えている。さらに内藤朝雄は、《現行の学校制度では、「仲良くする」と「まなぶ」ことが強制的に抱き合わせにされている》<sup>3</sup>ことが「いじめ」を助長していると分析し、学級制度を中心としない新たな教育制度のありかたを提言している。「いじめ」の社会問題化は、学校文化そのものを批判的に捉え、再構築しようとする議論を喚起したのである。

しかし、これらの提言にもかかわらず、日本において学級をはじめとした学校制度は維持されている。こうした中で近年、学校文化の孕んでいる暴力性・危険性を自覚したうえで、学校のもつ意義を再定位しようとする議論も多く示されるようになつて

きている。批評家で、現役の中高一貫校国語教員である矢野利裕は『学校するからだ』（二〇一二年）にて、学校における《身体的な交流が、いかにも學校的な体罰やいじめにもつなが》つてしまふことを十分に確認したうえで、《身体的な交流は別に暑苦しく社交的になることばかりを意味しない》とし、次のような見解を示している。

落ち込んでいる人に声をかけてみると、声をかけなくとも肩に手を置いてみると、相手の話にうなずいてみると、そんな微細な身体の動き。それどころか、意識にものぼらないような身体のやりとりによつても、人と人とは交流している。

学校に行くのが死ぬほどつらいなら学校なんて行かなくてもいいと思うが、微細な身体の交流が完全になくなつたら、それはそれで死ぬほどつらいのではないかと思う。学校がそうした社会とのつながりを全面的に担う必要はないが、あたりその大きな一部として存在しているのはたしかだ。<sup>4</sup>

矢野の見解は、人々の身体的交流が遮断されたコロナ禍の状況をふまえたものである。重要なのは《学校に行くのが死ぬほどつらいなら学校なんて行かなくていいと思うが》《学校がそうした社会とのつながりを全面的に担う必要はないが》といった断りである。矢野が示しているのは、教育課程を学校で過ごすことを自明視する旧来の価値観とは異なり、社会的なつながりを可能にする選択肢のひとつとして学校の意

義を捉え直す視点である。

また、不登校が議論されることと連動し、公教育とは異なった場所・方法で教育を実施するフリースクールをはじめとしたオルタナティブ教育の存在が知られるようになってきている。学校に行くことを当然とする価値観はいまだ根強いものの、旧来の学校以外の場所で教育を受ける選択肢も多くの人々によって保証されるようになつてきつつある。公教育、オルタナティブ教育の双方に長く取材するおおたとしまさも、公教育の学校を否定することはせず『学ぶうえで、学校はとても便利な場所ですから、利用できるなら利用しない手はない』と思いますが、学校でないと学べない時代ではあります』<sup>5</sup>と述べている。矢野やおおたの議論が提示しているのは、学校は行つて当然であるとする旧来の価値観とは異なった形で学校の意義を再定位していくことの重要性といえるだろう。教育を受ける機会として学校以外の選択肢が少なからず示されている中で、それでも学校に意義があるのでしたら、それはどのようなものなのかな。これを再考する機会が、いま現在の日本社会には到来しているのである。

と声をかけ、友達になつた。しかし、中学校は徐々に荒れ、今度はみちるが「いじめ」の標的となる。講師の吉川から「もう、学校なんか来なきやいいのに」と言われるが、みちるは先生に「ちゃんと学校に来いよって言つてほしい」と返し、登校つづける。一方、優子はフリースクール「学びの部屋」へ通うようになるが、そこででの生活にも意義を見出せずにいた。優子は、みちると共通の友達で「正真正銘の不良」である伊佐瞬から、自分の暴力を止められないこと、それを「やくざ」の父親の影響だと思い込んでいることを聞く。優子は、自分の受けているカウンセリングを真似て、「俺、なんとかなるかな」と言う瞬に「なんとかなるよ」と答える。そして、みちるが学校で一人、戦つてることを想起し、ふたたび学校に行くことを決意する。

卒業を間近に控えたある日、クラスでつくった花壇を「不良グループ」が壊そうとする。グループに唆され一緒に花壇を壊そうとする瞬の前で、みちるは花壇のレンガを自分の頭に叩きつけ、瞬の行動を止める。みちるはレンガを頭にぶつけた一瞬、教室という温室から抜け出し「外の空気を吸えた気がした」と優子に話す。そして後日、登校中に瞬と会つたみちるは、教室で最後まで過ごした誇りを感じつつ、「学校まで一緒に行こうよ」と声をかけるのだった。

以上の梗概にまとめた通り、本作の中心人物である女子中学生のみちる、優子はいずれも『いじめ』をはじめとした暴力にさらされながら学校生活を送っている。しかし、二人は学校から離脱しきつてしまふことはせず、最終的には学校に通うことを選ぶ。とくにみちるは、『放課後、一人で女子トイレの掃除を終え教室に戻つてくると、机の上にはぼろぼろになつたかばんが載つかけてい』（六九頁）るような、持ち物の破損を含む苛烈な『いじめ』を受けている。この状況を助けてくれる者は誰一人としておらず、教員すら『みちるが一人で教室掃除をしていても、何も言わない。今、みちるに手を貸すと、面倒なことになる。先生だってわかっているのだ』（六四頁）といふ有様で、教室にいる間は常に暴力を受けているような状況である。

## 一 学校中心主義との距離

本作の梗概は以下の通りである。

中学三年生の中森みちるは、小学六年生の一年間を荒れたクラスで過ごした。とくに前川優子への「いじめ」は酷いもので、これを理由に優子は転校する。みちるは、「いじめ」に加担してしまったことを後悔し、学校生活を立て直そうとし、卒業間近の数週間だけは「このクラスでよかつた」と思うことができた。

るのが怖い。その思いを振り切って、登校するのにも相当なパワーが必要だった》(九一頁)と思いつめられている。

たちからは「スペシャルサンドバッグ」を略して「エスエス」と呼ばれている。しかし、『軟弱そうに見えて受け身だけはうまい』ようで、暴力を振るわれる割には怪我が少な』(七八頁)く、『契約しちやつたし、仕方ないから、来年の三月まではがんばるけど、その後は高校とか予備校とか、ましな生徒がいそなところにスイッチするよ』(八五頁)と軽く口にする吉川の姿は、苦しんでいるというよりは状況を飄々とやり過ごしているようにみちるの眼には映っていた。『吉川の言葉は率直で、不快ではなかつた』(八六頁)ため、みちるにとつて気の置けない話題相手となる。

吉川がみちるを案じて『もうさ、学校なんか来なきやいいのに』(九八頁)と伝えたとき、みちるは『いじめ』に苦しんでいるにもかかわらず、次のように返答する。

「そういうの、すごく変だよ。学校に行かなくても大丈夫なようにするのが先生なの? つらいことがあつたら、逃げ場をつくつてあげるのが先生たちの仕事なの? そんなんじゃなくて、ちゃんとみんなが普通に教室で過ごせるようにしてよ。私は、先生に教室に行こうよって言ってほしい。ちゃんと学校に来いよって言つてほしい』(九九頁)

みちるは『私は間違っているのだろうか。学校に行くのが、教室で勉強するのが当たり前のことだつていうのは、偏った考えなのだろうか』(同)と煩悶する。まさに学校で『いじめ』に苦しんでいるはずの被害者自身が『当たり前』に学校に行くことを強く希求しているということ——こうした本作の表現を、いかに捉えるべきであろう。

不登校経験者のライフヒストリーを起点に、不登校後の人生設計や不登校を許容できる社会構想など、不登校の『その後』研究に取り組む貴戸理恵は、『女子読みのスマ』(二〇一三年)にて本作に言及している。貴戸は本作について『あえて学校のなかで踏ん張り続けることで、学校を超えていける瞬間がある——みちると優子の物語は、読者にそう語りかけているようです。いじめをテーマにした小説ながら、読後には希望的なるさが残ります』<sup>7</sup>と美点を評価しつつ、『いじめから「逃げる」ことをせずにひたむきに立ち向かうみちるのようなやり方が、現実に即しているかどうかは別の問題です』<sup>8</sup>として、本作への違和感を吐露している。

もちろん、周りの人に支えられながら、ゆつくりと時間をかけていじめ被害の傷を癒していくことはできるでしょう。けれども、そのために越えなければならないたくさんのハードル（しかもそれは、理不尽なことに、加害者が知り得ないもいい）と、それでも私は言いたい思いに駆られます。<sup>9</sup>

貴戸が示しているのは、『いじめ』に耐えてまで学校に行くことに価値を見出すこと自体への批判意識といえよう。文部省（現・文部科学省）は一九九二年、不登校は『どの子どもにも起こりうる』としたうえで、やみくもに登校刺激を与えるのではなく、必要に応じて休ませることこそが重要であるとする支援方針を提示した<sup>10</sup>。そして二〇一六年には、教育機会確保法にて不登校が問題行動ではないと明言し、学校がフリースクール、学びの多様化校、夜間中学といった学外機関と連携することをすすめるに至る<sup>11</sup>。教育を受ける機会として学校は絶対ではないとする価値観はゆるやかに根づいており、まして本作のように『いじめ』が関わる事例であれば、無理をして学校に行く必要はないと考えるのはほとんど常識といつてよい。『いじめ』に苦しむ中学生自身に『私は、先生に教室に行こうよって言つてほしい。ちゃんと学校に来いよって言つてほしい』と口にさせる本作は、こうした時代状況の中ではなおさら、『いじめ』をはねかえして学校に行け』式のいかにも旧来の学校中心主義的・自己責任論的な価値観へと退行しているように映ってしまうだろう。

実際、本作の発表当時『本の雑誌』に掲載された書評にも、『個人的には、これを読んでも二度と中学時代に戻つてやり直してみたいとは思わないが、今まさに戦っている人たちにぜひおすすめしたい。学校生活を放棄することなく、がんじがらめの状態を打ち破るヒントが見つかるはずである』（島田美里）といつた賛辞のほかに、『何なんだ、この展開。学校がそれほどご大層な場所か? ピンとこない話である』（松本かおり）、『あの時代を懐かしく思い返せる大人が読むには、いい物語だと思う。だからこの物語は安易で、読み心地がいい』（新富麻衣子）等と、本作を批判的に捉えているものが多くある<sup>12</sup>。評者らの指摘する難点は、貴戸の示している違和感とそのまま重なるものといえよう。本作は、『いじめ』や不登校を表現した作品として広範な読者を獲得する一方、悪しき学校中心主義への退行ではないか、という批判にも取り巻かれてきたのである。

しかし、本作にて提示されているのが、不登校の選択肢を否定し学校に行くことを絶対視する価値観であるとする読みは、本作への理解として十分なものといえるだろうか。たしかに、みちるはいかなる苦境に置かれても学校に行くことをやめようとしている。しかし、それほどまでに固執した学校生活の最後、みちるの脳裏には学校の『外』への意識が芽生えているのである。

卒業を間近に控えたある日、卒業制作としてクラスでつくりあげた花壇を「不良グループ」が壊そとする事件が起きる。吉川は「不良」たちをナイフで脅す奇策によつて阻止していたが、ついに止めることができなくなる。花壇を壊そとする生徒の中

には、グルーパに唆された瞬の姿もあった。『私が瞬を止められるとしたら、予想外の行動に出る。それしかない』(二〇四頁)と考えたみちるは、瞬の目の前で花壇のレンガを自分の頭に叩きつけ、『これと同じこと、瞬にもするよ』(二〇六頁)と言い放ち、瞬の行動を止める。このときのことを後日、みちるは優子に次のような言葉で話す。

「ほんのちょっと、レンガに頭ぶつけてみて、この温室から抜け出せた気がした」

「温室？何それ」

「ほら、先生たちすぐ言うじゃん。社会に出たら、もっと厳しいんだぞ。中学

校生活なんてぬるま湯だって、温室みたいなもんだって」

「ああ。なんか聞いたことあるね」

「うん。そこからさ、ほんの一瞬だけど、抜け出して、外の空気を吸えた気がした」

(二二二頁)

これは本作の終盤に置かれた会話である。頑ななまでに学校に通いつづけたみちるは、最終的には学校にいながらにして学校の『外の空気を吸えたような気がした』と語るのである。従来、呈されてきた疑義の通り本作が学校中心主義へ退行しているのであれば、なぜ本作の最後、みちるは学校の『外』を意識するのだろうか。ここに示されているのは、学校を絶対視する旧来の価値観とは異なった感覚であるように思われる。みちるが事実、学校に通いつづけているという展開そのものによって本作を斥げてしまうのではなく、より詳細に分析されなくてはならないところであろう。そのためには、みちると優子の辿った心情の遍歴を丁寧にたどり直してみる必要がある。次節より検討していきたい。

## 二 学校に行く理由、行かない理由

みちるが学校という場に強い思いをもつ背景に、小学生時代の後悔があることは推測に難くない。小学六年生の頃、みちると優子の属していたクラスは一学期のはじめから荒れており、しばらくすると優子への『いじめ』が始まる。優子のことをまだ「前川さん」と呼んでいたみちるは、数名の女子たちが優子のシャープペンシルに難癖をつけていたとき、『そんなの別にいいじゃない』という本心ではなく、その場の空気に従い『それって、最悪。かなりむかつく』と言い、『いじめ』に加担してしまった(二二頁)。このときから『自分のしたことが何より残酷なことのような気がしていた』(二三頁)みちるは、優子が転校することを聞き、自分の行為を激しく後悔する。そして、その後は自分たちなりに学校生活を立て直し、卒業間近の数週間だけは、送ってきた学校

生活に充実感をもつことができた。この体験が深く刻み込まれているみちるは、中学生になった現在も『正しいことができない苦しさ、だらけきつたどんよりした空気、立て直す時のもどかしさ。もうあんな日々は送りたくない。誰かを傷つけたり、仲間を追い込んでしまう後味の悪さ。もうあんな気持ちちは味わいたくない』(一五一六頁)と強く願っている。

だからこそ、中学校が荒れていき優子が嫌がらせを受けていることを知ると、『まだこの中学校は完全に崩れたわけじゃないし、今なら、なんとかなるはずだよね』と『切実な顔』で伝え(五六一五七頁)、余計なことはしないほうがいいと何度も念を押す優子を振り切り、終礼で立ち上がり『そろそろうちのクラスだけでも、ちゃんと登校と不登校のあいだを』(二二三頁)と発言するのである。しかし、これを機にみちるに対する執拗な『いじめ』が始まってしまう。

『いじめ』を受けるようになつてもみちるが頑ななまでに学校に行こうとするのはなぜなのか。改めて本文を読み直してみると、学校に行くことへの強い欲求にもかかわらず、その理由はほとんど言語化されていない。たとえば、前節でも見た『私は間違っているのだろうか。学校に行くのが、教室で勉強するのが当たり前のことだつていうのは、偏った考えなのだろうか』という煩悶には、学校で勉強することを『当たり前』とする価値観が表れている。同様に、三学期になってから一度も学校に來ていない優子の家を訪ね、優子から『まさか、みちるはちゃんと行つての?』と問われた際にも『当たり前でしよう』と答えている(一〇九頁)。酷い『いじめ』を受けても登校しつづけることを不思議に思う人々に対し、みちるは徹底して『当たり前』という言葉によつて答えているのである。そして、階段で吉川と話したあとには『あの教室に戻るのは気が重い。だけど、このままここで過ごしたら、もっと行きたくないなつてしまふ』(八六頁)と、校内の相談室で優子と話したときには『ここで優子と勉強できたら、ずいぶん楽だろう。今抱えている苦しみの八割は消すことができる。でも、違う。まだうなずいちゃだめだ』(九六頁)と、苦しみを押し隠すようにして自分を傷つける教室へと戻つていく。

このように、『当たり前』という言葉でしか表現できないまま登校をつづける背景には、幼少期から接してきた父親の影響もあつただろう。心身を鍛えることに力を注ぐ父の方針で幼少期から空手を習つてきたみちるは、『父さんはいじめに遭つていて知つたら、きっと、私に怒るだろう。しっかりと、私にやつにやしてからいけないんだ。ふにやふにやしているからいじめられるんだって』(七〇頁)と思ひ込み、家族に被害を打ち明けることはせずにいた。しかし、破れた制服姿で帰宅した日、父親から掛けられた言葉は『平気なわけない。もう、あんな学校なんて行くな』(一〇五頁)といつものだつた。父親が不登校の選択肢を提示してくれたことにみちるは『父さんの頭は、私が想像していたより、ずっと柔らかかったのだ』(同)と感涙するが、それ

でもなお、その言葉に従つて登校をやめる選択はしないのである。

そして、私は父さんの言葉を聞くうちに、なぜか少し元気になつていて。どうしてだろうか。まだやれそうな気がしていた。父さんにいじめがばれたことで解放されたのか、ここまで来てしまつて、開き直つているのか、理由はわからない。だけど、まだ、あの教室でがんばれる。そう思った。(一〇六頁)

父親が「いじめ」に負けず強くあることを強制するような人物ではないとわかつたあとでも『まだ、あの教室でがんばれる』と決意を新たにする。しかし、ここでもまた、その決意が可能になる理由は『わからない』と語っている。これらの点から、みちるが学校に行くことを明確な理由によつて決断しているわけではないと認識しておかべきであろう。みちるは、自分でも理由を言語化できないままに、どうしようもなく学校に行きたいと思わずにはいられない人物として造形されているのである。

明確な理由をもたないまま登校をつづけるみちるの姿を描く一方、本作には、自分の立場を明確な言葉によつて理由づける人物の姿も描き込まれている。自分を『有能なパシリ』(三八頁)と称し、昼休みにはクラス全員分の買い出しをみずから行なつている男子生徒の齊藤は、みちると優子に『パシリになるのと、パシラされるのは根本的に違うんだって。まあ、なんでも先手必勝』(三九頁)と語る。齊藤は「パシリ」の立場に身を置く理由を言語化し、そこにある種の誇りを見出している。この思考には優子も『パシリにされるのはみじめだけど、パシリになるのは自分の中で折り合いがつく』(同)と納得せざるを得ない。しかし、それはあくまでも『パシリになる』ほうが『パシリにされる』よりも「まし」であるということに過ぎず、「パシリ」であることが中学校生活の送り方として最善であるはずはない。本作は、明快な言語化によって自分の立場を決めてしまうことは非を早くから問うていてある。

そして本作は、みちるの『私はみんなの言うとおり、教室に行くべきではないのかもしれない』(九九頁)という逡巡の側を正解とすることもしない。優子の姿を通して、学校に行かないことの意味をも問うていくからである。

みちるが『いじめ』を受けるようになつたとき、優子はクラスの空気に反旗を翻すことはおろか、みちるに話しかけることすらできなかつた。小学生時代、自分自身の受けた『いじめ』の記憶から『今、みちるに関われば、私も確實にいじめられる』(六七頁)と直感していただためである。みちるの助けになりたい気持ちと保身の板挟みになり、優子は『無理だな。そう思つた。もうこんな場所にはいられない。私は教室にいることをやめにした』(同)と決断する。そして、校内の相談室への登校を経て、フリースクール「学びの部屋」に通うようになる。

優子が「学びの部屋」に通うことにしたのは母親の勧めによる。校内の相談室登校

を一週間休んだ後、母親が『優子と同じような気持ちの子ばかりだから、きっと、話をも合うだらうし、居心地もいいはずよ』と持ちかけたのに対し、優子は『私と同じような気持ちの子。それは、いつたいどんな子だらう』と疑問に思いつつも承諾する(一一二頁)。しかし、校内の相談室にすら『何もやるべきことがない、何もしなくてはいけないことがない、抜け殻みたいな空間だ』(一〇七頁)と甲斐を感じられなかつた優子は、「学びの部屋」ではさらに満たされない思いを抱えることとなる。自分の意志で『教室にいることをやめにした』はずが、『相談室よりも、みちるがいるあの教室から切り離されている』(一一五頁)場所にいつづける意味を見出すこともできない。

この焦燥感は、『学びの部屋』に二年間通つている道下との会話によつてより強められる。道下は、学校に通わず『学びの部屋』に在籍することに強い矜持をもつてゐる。道下は『体育祭とか文化祭とか、ああいう行事がばかりしく』感じ、『みんなで同じ服着て、同じ方向見て、何の疑問も持たずに、教室つていう四角い小屋の中で一日いることに耐えられなくなつた』のだという(一一七頁)。初対面のときから道下によい印象をもつていなかつた優子は道下の言葉を話半分で聞き流すが、道下に『前川さんもそうだらう?』と同意を求められると、『勝手に決めないでよ』と強い拒絶反応を示す(同)。しかし、いざ道下から『じゃあ、どうして? どうして前川さんは学校に行かないんだよ』と訊かれると、それに答えることもできない。

いつたいどうして私は、学校に行かないのだろう。みちるがいじめられているのを見るのが嫌だから? ごちやごちや崩れていく学校に身を置くのが嫌だから? それが理由だらうか。行こうと思つたら学校に行ける。今はあの場所に行きたくないだけだ。本当にそうだらうか。だったら、がんばつても学校に行くべきだ。みちるのためにも、行つてあげなくちゃいけない。もしかすると、本当に私は、学校に行けなくなつてしまつたのではないだらうか。(一一八頁)

優子の感じている『いつたいどうして私は、学校に行かないのだろう』という不安は、母親から『優子と同じような気持ちの子ばかりだから』と、道下から『前川さんもそだらう?』と言われたときの疑問や反発の裏返しであると考えられよう。加えて、尾崎豊の楽曲「卒業」(一九八五年)と似た内容を含む道下の言葉に対し、優子は『なんだつけ、その支配からの卒業つてやつ。道下君の言葉つて、偉そうに言ってるけど、かなり古いよ』(一二九頁)と冷めた感情しか抱けない。優子は、学校に行くことに拒絶反応を示しながらも、学校に行かないこと自体によつて社会への反抗を表明し、自らのアイデンティティを保つような共同体に参入することもできないのである。優子もまたみちると同様、不登校の選択を明確な理由によつて維持することは

できない。学校に行かない理由を言語化することのできないまま、優子は寄る辺ない自分への不安ばかりを募らせていくのだ。

以上のように本作は、学校に行く理由、行かない理由の双方が言語化されることのないまま、「当たり前」という言葉に衝き動かされるようにして登校をつづけるみちると、『いつたいどうして私は、学校に行かないのだろう』という不安とともに不登校の日々をつづける優子の姿が示されていく。この展開は一見、やはり学校に行くことには意味があり、学校に行ないことには意味がない、という二項対立的な構図を前景化させているように見える。しかし、この後カウンセリングに通うことになった優子によって体現されていく思索は、この構図とは異なったものである。

『学びの部屋』に通つても登校が促されないことを悟った母親によつて、優子さんは週二回のカウンセリングに通うことを勧められる。最初は『どこでも、お母さんの好きなところに、連れて行けばいい。どうせ私には、行きたいところなど何一つないのだ。別室登校、学びの部屋、カウンセリングルーム。どこまで統いていくのだろう。どこかに出口はあるのだろうか』(一二三頁)と思つていた優子にとって、このカウンセリングはいかなる意味を持ち得たのか。次節にて考えていきたい。

### 三 学校空間の意義

登校と不登校のあいだ

母親の勧めで通うことになつたカウンセリングに対し、優子ははじめ怠慢を指摘され学校に行くよう強制されるにちがいないと思つていた。しかし、カウンセラーの宮下は優子が『どう答へても、とやかく言わず、どんな答えもすんなり受け入れ』(一二六頁)てくれ、強引な診断を下されることもなかつた。最初は警戒していた優子も、互いの家族の話を共有したことで宮下に安心感を抱き『違うところもたくさんあるけど、宮下さんとほんのちょっと共通点があることが、なんとなく嬉しかつた』(一三四頁)気分になる。

そして『学びの部屋』で優子は、一日おきに通つてゐる野口と言葉を交わす。優子にとつて『この日本で、今時がりがりなんて言葉がぴたりとあてはまる女の子を見たのは、初めて』(一三四頁)だつた野口は、優子がカウンセリングを機に『学びの部屋』で取り組むようになつた絵をじつと見ていた。野口にも描いてみることを勧めた優子は、描き上げられた絵を見て、『その木には生氣がひとつもな』く『とんでもなく氣味が悪』いことに驚く(一三五頁)。そして話を聞くうち、野口が家庭では兄や両親から暴力を受け、学校ではクラス全員から無視されていること、それはけ口としてリストカットがやめられないでいることを知る。『自分の言葉を受け止められるのが嬉しいのか、訊きもしないのに、いろんなことをしゃべりはじめ』(一三八頁)る野口の姿を見ながら、優子は次のような気づきを得る。

私がうなずくのを確かめて、野口さんは傷についての話をひとつする。自分の身体を切る感覚は私にはわからない。でも、本当に飢えている人間がいるんだ。私や道下のようなプチ登校拒否にはわからない、本当に狂いそうな中学生が現実にいるんだ。こんな小さなうなずきが必要な中学生が。自分の身体を傷つけてでもはけ口が必要な中学生が。私はそれを初めて知つた。(一三九頁)

優子は、カウンセリングで『違うところもたくさんあるけど、宮下さんとほんのちよつと共通点がある』宮下との出会いを経て、身近に存在していた『こんな小さなうなずきが必要な中学生』といふ他者に気づくのである。そして、『私のすぐそばにも、そんな中学生がいる』(一三九頁)と、伊佐瞬のことを思い出す。いつもヘッドホンで大音量の尾崎豊『卒業』を聴いていた瞬は、両親の離婚により母親と妹、弟が家を去り、『やくざだ』という噂(四九一五〇頁)の父親とふたりで暮らしていた。

優子は瞬の家に自転車で向かい、カウンセリングのつもりでとりとめのない話をする。毎日同じように話していくある日、顔に青あざをつくってきた瞬は、自分の暴力性を自分で制御できないことを『止められないんだ』『身体が勝手に動くんだ』(一五七頁)と語る。そして、その原因は『やくざ』である父親の血が自分に流れているからだと思つてゐることを打ち明ける。

優子は、カウンセリングルームで身につけたことでは追いつかなくなつて』(一六〇頁)いることを感じつつ、どう答えていいかわからないなりに、懸命に話を聞く。そして瞬と次のようないい話をする。

「親父と一緒にるのが、俺なんだ」

伊佐君は吐き出すように言つた。

「決めちゃだめだよ」

「決めたくないたつて、決まつてんだ」

「そんなことない。自分で先を決めちゃうほど、ばからしいことはないよ。自分を変えられるのは、自分だけなんだから。伊佐君の気持ち次第で、伊佐君はどんな風にでも変われるんだよ」

「そんなうまくいくかよ」

「そんな風に考えるのだめだつて。絶対、そんなの、嫌だから」

「だめとか、嫌とか、意味わかんねえし」

「そんな風に血だとか、親父と一緒にだとか言うの、嫌なんだつて」

「お前に嫌とか言わることじゃねえ」

「嫌なものは嫌なの。すごく嫌だから嫌なんだつて」(一六一一六二頁)

この会話に示されているのは、「決めてしまふ」ということに対する優子の強い反発である。前節で見た通り、優子は明確な理由づけによつて『パシリになること』を決めてしまつた齊藤には『パシリにされるのはみじめだけ、パシリになるのは自分で折り合いがつく』と同調してしまつていた。しかし、瞬の話を『私はこんなに苦しそうに何かを話す人を見たことがない。隣にいる私まで息が苦しくなつた』（一六一頁）という思いで聞くうち、自分のあり方を特定の形に決めてしまうことへの反発をはつきり口にするのである。

その後、瞬に『俺、なんとかなるかな』と問われると『なんとかなるよ』と答え（一六三頁）、『だつたら、学校、行きやいいじやん』と言われると『そうだね』と答える（一六五頁）。こうして優子は『卒業まで一ヶ月。伊佐君のいる学校。みちるが戦つている場所。それは、学びの部屋より、カウンセリングルームより、行く価値がある』（一六六頁）と思うようになるのである。以上のように、優子は学校外のカウンセリングルームで身につけた会話を真似して瞬と話すことを通し、瞬やみちるが『いる』ということを理由に、ふたたび学校に行くことを決める。本作のこうした表現には、どのような意義づけが可能であろうか。

「はじめに」でも触れたように、不登校が議論されるのと連動して、公教育とは異なるた場所・方法で教育を実施するオルタナティブ教育の存在が知られるようになつてきた。オルタナティブ教育は必ずしも公教育と対立するものではないが<sup>13</sup>、日本においては公教育に適応できない子どもの受け皿として始まつた側面が強いため、公教育との差異化によつて意義が語られる場合が多くあつた。

たとえば、日本における最初期のフリースクールとして一九八五年に「東京シユーレ」を開設した奥地圭子<sup>14</sup>は、エッセイ『登校拒否は病気じゃない私の体験的登校拒否論』（一九八九年）にて『登校拒否は病気ではない。子ども、人間として当然の表現である。病んでいるのは学校だ』といふことは、東京シユーレを三年半やつてきた私の素朴な確信でもあります<sup>15</sup>』と述べ、公教育の現状を批判している。

学校を変えようと、私は二十二年間もやつてきました。世間的にも教育の荒廃ということが言われるようになつてから十五年ぐらいたつていますが、では学校現場が変わつたかと、それには否定せざるをえません。教育を変えようと、右から左までどれほどたくさん的人が研究したり、発言したり、行動したりしてきたでしょう。でも、日本の教育はよくなつたか。ノー、です。自殺、いじめ、登校拒否は増え、子どもたちは点数競争においてられつつ、うんざりしています。<sup>16</sup>

加えて奥地は、不登校が病気とみなされることの多い世論に反発し、東京シユーレ

で自分なりの学びに取り組む人々を「明るい登校拒否」として紹介する<sup>17</sup>。奥地の実践により、不登校を主体的な選択として肯定的に語ることが可能になつた意義ははかりしない。一方で、奥地の実践からさらに思考を深める必要性があることも指摘されている。たとえば貴戸理恵は、奥地が打ち出した「明るい登校拒否」像によって、不登校を主体的に選択している者ばかりではない現実が覆い隠されてしまつたことを分析している<sup>18</sup>。また、不登校研究においては、学校に通つてはいるものの休みがちであるなど、不登校グレーゾーンの子どもが多く存在することも明らかにされてきた<sup>19</sup>。加えて、非行によつて結果的に不登校の状態になつている子どもが不登校支援の対象から周縁化されてしまつた事例も指摘されている<sup>20</sup>。

これらの議論から見えてくるのは、公教育との差異化によつて不登校を肯定的に意味づける枠組みが確立していくとともに、その枠組みに参入できない存在も少なからず生じてきた歴史である。この点について樋口くみ子は、登校と不登校を厳密に峻別することによつて『登校／不登校間の強固な枠組みを維持することは、「非行」系といったグレーゾーンの子ども達を支援から周縁化させるだけでなく、非不登校者と不登校者がともに問題を共有し、接合する機会を遠ざける危険性がある』<sup>21</sup>と問題提起している。

優子や瞬はまさに、不登校の傾向をもちながら、不登校を肯定的に意味づける枠組みにも参入できない存在といえるだろう。優子は、いちどは不登校を選択するものの、学校から距離を置いた場所にいることにもアイデンティティを見出せない。瞬は、『学校に来るのは、週の半分くらい、たいてい昼過ぎ』（一六頁）の生活をつづけており、周囲からは「不良」と恐れられるばかりで支援の対象とはみなされない。当たり前に学校に通うことができない一方、不登校を肯定的に意味づける枠組みにも参入できないことがあることが、優子と瞬に特有の困難を抱え込ませているのである。

『温室デイズ』の画期性は、自分の立場を登校／不登校のいずれにも決められない子どもたちが共に身を置くことのできる場として、学校空間そのものを捉え直した点にある。現代日本において、ほとんどすべての子どもは否応なく公教育の学校制度に取り込まれている。ならば逆説的に、学校に馴染めない一方、既存の不登校の枠組みに参入することもできない子どもたちが時空間を共有する機会が、学校空間の中に生じることもありうるのでないか。本作は、その可能性を示しているのである。

本節にて見えた通り、優子は学校に行くことをやめたあと、校内の相談室、「学びの場」、カウンセリングルームと、学校外の施設で時間を過ごす。その過程で手にしたカウンセリングの発想を瞬と共有することで、学校外の文化を学校内へと持ち込む。これは、登校／不登校を厳密に峻別する二項対立の構図に揺さぶりをかけ、学校外にある文化によつて学校文化をときほぐそうとする志向といえるだろう。そして本作の終盤、衝動的に『身体が勝手に動く』ことを繰り返してしまいそうになつた瞬の

暴力を止めるみちるの行動は、自分のあり方を「不良」と決めてしまうことに対する反抗に他ならない。この行動によってみちるは学校という温室の『外の空気を吸えた気がした』と優子に語る。みちるにとつても学校は、いちどは学校外に離脱した優子や瞬とも同じ時間を過ごせる場へと変質しているのである。

本作は、卒業式を目前に控えた日、登校中のみちるが瞬に声をかける場面で幕を閉じる。

次はまた違った温室が私を待っている。三年間、どうなつてしまふのか、わからない。また、中学校と同じような日々が待っていたら不安になる。でも、またやつてみたい。私はまた学校生活を送つてみたい。

〔瞬〕

「ああ？」

うつとうしそうな瞬の低い声が聞こえる。相変わらずだ。でも、瞬はちゃんと足を止めて振り返る。

〔学校まで一緒にに行こうよ〕

私は瞬の横に駆け寄つた。(二一五頁)

ここでみちるが『一緒にに行こうよ』と瞬を誘う学校は、旧来の価値観によって行くことが自明であると決められてしまつてゐる場ではない。学校空間に対してそれぞれの形で自分を位置づける人々が共存する可能性を有した場である。こうして本作は、学校中心主義とは異なる形で、学校の意義を再定位するのである。

おわりに

以上、瀬尾まいこ『温室デイズ』について、みちる、優子、瞬の姿を通して自分のあり方を「決めてしまう」ことへの批判意識を示し、自分のあり方を登校／不登校のいずれにも決められない人々がともに身を置く可能性を有する場として学校空間そのものを再定位した作品であると読解してきた。

本稿での分析をふまえ、作中における教員のあり方についても言及しておきたい。本作は、子ども自身の手で学校空間の意義が捉え直される可能性をフィクションとして提示したものである。しかし、その意義が示される過程には、「スクールサポーター」の名目である吉川を例外として、教員はほとんど関与していない。みちるや優子の教員の動きは鈍い。大事にならないと、動きださない》(三頁) ような無力な存在として捉えられている。

こうした教員の表象を通して問われることとなるのは、学校文化のあり方を再考し、その意義を再定位する営為を、子どもの自己責任に押し付けるのではない形で現実のものにしていくことはできるのか、という点であろう。本来、学校に通うことは、学校文化のすべてに同化することと同義ではないはずである。学校空間に身を置きながらも学校文化への違和を手放さないでいることはあってよいし、あって然るべきである。その機会を教員はいかにつくりだしていくのか思考することこそが、現実の学校に課せられた役割といえるだろう。

最後に、フリースクール「東京シェーレ」を開設した奥地圭子が示していた、次のような見解を想起しておきたい。

学校外の居場所をつくつたり、オルタナティブ・スクールをつくつたりすることと、公教育学校を変えることは矛盾しません。学校に背をむけはじめている子がふえてはいますが、ほとんどの子は学校へ行つてているいま、なんとか、学校が楽しい場になるように変えていく必要はあります。(中略) 沈みかけている船を修理して旅をつづける方向もあれば、新しい船をつくつて、航海をつづける方向もあると思います。いま、複眼が必要です。<sup>22</sup>

学校に行きたくない人々の居場所として、オルタナティブ教育の選択肢は少しづつ保証されるようになつてきた。では、学校に「行きたい」と思つてゐる人々の側についてはどうだらうか。公教育の学校は、学校に行くことを選んだ人々の居場所となることができているだらうか。不登校の選択肢を肯定すると同時に、現行の学校について『なんとか、学校が楽しい場になるように変えてい』こうと試みるとき、貴重な思索のひとつとして本作は記憶されておくべきであろう。

なお、本稿では異なつた立場にいる人々がともに過ごす場として、学校空間に肯定的な意味づけを行なつた。しかし、雑多な人々が時空間を共有することにより暴力的な人間関係が生じてしまう場合もあるだらう。この点について瀬尾まいこは後年、家庭における虐待やDVと学校における『いじめ』の複雑な連鎖を問題化した『僕の明日を照らして』(二〇一〇年) を発表し、より思索を深めている。機を改めて論じることとしたい。

## 注

<sup>1</sup> 「いじめ」は現代日本において日常語として定着しているといつてよいものの、教育社会学における「いじめ」言説研究では、「いじめ」を自明の現象としてではなく、人々の認識によって事後的に構築される現象として捉える観点が提示されている。こ

の観点をふまえ、本稿では「いじめ」と山括弧を付す表記とした。

<sup>2</sup> 柳治男『〈学級〉の歴史学 自明視された空間を疑う』（講談社選書メチエ、一〇〇五年三月）一七八頁。

<sup>3</sup> 内藤朝雄『いじめの構造 なぜ人が怪物になるのか』（講談社現代新書、一〇〇九年三月）二二八頁。

<sup>4</sup> 矢野利裕『学校するからだ』（晶文社、一〇一二年一二月）二七〇頁。

<sup>5</sup> おおたとしまさ『学校に染まるな！ バカヒルールの無限増殖』（ちくまプリマ―新書、二〇一四年一月）五七頁。

<sup>6</sup> 本作は『野性時代』一〇〇四年八月号、一二月号に連載され、単行本は一〇〇六年七月に角川書店より刊行、一〇〇九年六月に文庫化された。本文引用は角川文庫版に依り、引用文の末尾に（）で頁数を示した。

<sup>7</sup> 貴戸理恵『女子読みのススメ』（岩波ジュニア新書、一〇一三年九月）一〇一二頁。

<sup>8</sup> 注<sup>7</sup>と同じ、二一一二頁。

<sup>9</sup> 注<sup>7</sup>と同じ、二一一二二頁。

<sup>10</sup> 文部省初等中等教育局「登校拒否（不登校）問題について児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して（学校不適応対策調査研究協力者会議報告）」（『教育委員会月報』第四四卷二号、一九九二年五月）二五一二九頁。

<sup>11</sup> 文部科学省「教育機会確保法リーフレット」一〇一一年一〇月  
([https://www.mext.go.jp/content/20231018-mxt\\_syoto02-000021384\\_001010.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20231018-mxt_syoto02-000021384_001010.pdf))

<sup>12</sup> W E B本の雑誌「今月の新刊採点」一〇〇六年九月。  
([https://www.weldokku.jp/shinkan/0609/t\\_3.htm](https://www.weldokku.jp/shinkan/0609/t_3.htm))

<sup>13</sup> 注<sup>22</sup>を参照。

<sup>14</sup> 奥地圭子および「東京シユーレ」の実践については、田中佑弥『学校に行かない子どもの社会史 不登校とフリースクールの源流』（慶應義塾大学出版会、二〇一四年一月）の分析に示唆を受けた。

<sup>15</sup> 奥地圭子『登校拒否は病気じゃない 私の体験的登校拒否論』（教育史料出版会、一九八九年二月）九一一〇頁。  
注<sup>15</sup>と同じ、六〇頁。

<sup>16</sup> 奥地は『少なくとも、明るい元気な登校拒否というのは、登校拒否した自分を否定的にだけみているのではない』ところが貴重だと思います』（注<sup>15</sup>と同じ、二二四頁）と、不登校によって東京シユーレに通っている子どもたちに肯定的な意味づけを行なっている。

<sup>18</sup> 貴戸理恵は、『選択』の結果が低い学歴や条件の悪い労働につながりうるという社会構造的な不平等は、不登校や「居場所」の「否定」だと見なされ、指摘されるこ

とがなかった。同時に、心身の症状や「ひき」もあり、「暴力なども、そこでは「明るい不登校」に至る途上の受容すべきマイナスの副産物として二次的に位置づけられることになつたのである』（『不登校は終わらない「選択」の物語から「当事者」の語りへ』新曜社、二〇〇四年一月、六一頁）と述べている。不登校に肯定的な意味づけを行なうために打ち出された「明るい登校拒否」像が、その「明るさ」に收まらない不登校のあり方を覆い隠してしまつたことへの批判である。

<sup>19</sup> 日本における不登校研究の基礎を築いた森田洋司は、『教師の指導も一般的な遅刻・早退のための指導は行なわれるとしても、「不登校」という視点からの対応はないまに放置されてきた』一方で『問題や悩みを全く抱えていない生徒でもない』ような子どもを不登校の「グレイゾーン」と捉えたうえで、『グレイゾーン』の生徒と不登校による欠席生徒が共通して抱いている「学校へ行くのが嫌だ」という感情が、現代の中学生の間にかくも広く浸透している背景を明らかにすることは、今日の不登校問題を解明し、対応策を講じて行くために不可欠な作業である』とする問題意識を示している（『不登校』現象の社会学）学文社、一九九一年二月、三一―三三頁）。この点については高坂康雅も『もつと言えば、毎日学校に行き、授業も受けることができているけれども、学校に行くのがとてもつらい子どもや、学校に行く時間になるとグズつたりする子ども（登校渋りをみせる子ども）も少なくありません。このようなギリギリ不登校になつていなくていい子ども、いわば不登校グレイゾーンの子どもたちも、実際にには多くみられています』（『不登校のあの子に起きていること』ちくまプリマ―新書、二〇二五年七月、二〇頁）と述べており、近年においても事情は変わっていないといえよう。

<sup>20</sup> 樋口くみ子は、教育委員会の設置する適応指導教室（後の教育支援センター）において、非行によつて学校に通つていらない子どもが支援対象から外されてしまふケースが多いことを分析している（『教育支援センター（適応指導教室）の排除過程 クレームが顕在化しないメカニズム』『ソシオロゴス』第三五号、二〇一一年一〇月）。

<sup>21</sup> 樋口くみ子『周縁化される「非行」系の不登校一風の子学園事件をめぐるメディアフレーム分析』（『現代の社会病理』第二八号、一〇一三年一〇月）一〇八頁。  
奥地圭子『東京シユーレ物語 学校の外で生きる子どもたち』（教育史料出版会、一九九一年一月）三〇〇一三〇一頁。

【付記】本研究は、JSPSS科研費25K22982の助成を受けたものである。